出帆

芥川龍之介

成瀬(なるせ)君

君に別れてから、もう一月(ひとつき)の余になる。早いものだ。この分では、存外容易に、君と僕らとを隔てる五、六年が、すぎ去ってしまうかもしれない。

君が横浜を出帆した日、銅鑼(どら)が鳴って、見送りに来た連中が、皆、梯子(はしご)伝いに、船から波止場(はとば)へおりると、僕はジョオンズといっしょになった。もっとも、さっき甲板(かんぱん)ではちょいと姿を見かけたが、その後、君の船室へもサロンへも顔を出さなかったので、僕はもう帰ったのかと思っていた。ところが、先生、僕をつかまえると、大元気(だいげんき)で、ここへ来るといつでも旅がした

くなるとか、己（おれ）も来年かさ来年はアメリカへ行くとか、いろんなことを言う。僕はいいかげんな返事をしながら、はなはだ、煮切らない態度で、お相手をつとめていた。第一、ばかに暑い。それから、胃がしくしく、痛む。とうてい彼のしゃべる英語を、いちいち理解するほど、神経を緊張する気になれない。

　そのうちに、船が動きだした。それも、はなはだ、緩慢（かんまん）な動き方で、船と波止場との間の水が少しずつ幅を広くしていくから、わかるようなものの、さもなければ、ほとんど、動いているとは受取れないくらいである。おまけに、この間の水なるものが、非常にきた

ない。わらくずやペンキ塗りの木の片（きれ）が黄緑色に濁った水面を、一面におおっている。どうも、昔、森さんの「桟橋（さんばし）」とかいうもので読んだほど、小説らしくもなんともない。

麦わら帽子をかぶって、茶の背広を着た君は、扇を持って、こっちをながめていた。それも至極通俗なながめ方である。学校から帰りに、神田（かんだ）をいっしょに散歩して、須田町（すだちょう）へ来ると、いつも君は三田（みた）行の電車へのり、僕は上野（うえの）行の電車にのった。そうしてどっちか先へのったほうを、あとにのこされたほうが見送るという習慣があった。今日（きょう）、船の上にいる君が、波止場（はとば）

をながめるのも、その時とたいした変わりはない。（あるいは僕のほうに、変わりがないせいだろうか）僕は、時々君の方を見ながら、ジョオンズとでたらめな会話をやっていた。彼はクロンプトン・マッケンジイがどうとか言ったかと思うと、ロシアの監獄へは、牢（ろう）やぶりの器械を売りに来るとかなんとか言う。何をしゃべっているのだか、わからない。ただ、君を見送ってから彼が沼津（ぬまづ）へ写生にゆくということだけは、何度もきき返してやっとわかった。

そのうちに、気がついて見ると、船と波止場との距離が、だいぶん遠くなっている。この時、かなり痛切

に、君が日本を離れるのだという気がした。皆が、成瀬君万歳と言う。君は扇を動かして、それに答えた。が、僕は中学時代から一度も、大きな声で万歳と言ったことがない。そこで、その時も、ただ、かぶっていた麦わら帽子をぬいで、それを高くさし上げて、パセティックな心もちに順応させた。万歳の声は、容易にやまない。僕は君に、いつか、「燃焼しない」（君のことばをそのまま、使えば）と言って非難されたことを思い出した。そうして微笑した。僕の前では君の弟が、ステッキの先へハンケチを結びつけて、それを勢いよくふりながら「兄さん万歳」をくり返している。……

後甲板（こうかんぱん）には、ロシアの役者が大ぜい乗っていた。それが男は、たいてい、うすぎたない日本の浴衣（ゆかた）をひっかけている。いつか本郷座（ほんごうざ）へ出た連中であるが、こうして日のかんかん照りつける甲板に、だらしのない浴衣がけで、集っているのを見ると、はなはだ、ふるわない。中には、赤い頭巾（ずきん）をかぶった女役者や半ズボンをはいた子供も、まじっていた。——すると、その連中が、突然声をそろえて、何か歌をうたいだした。やはり浴衣がけの背の高い男が、バトンを持っているような手つきで、拍子（ひょうし）をとっているのが見える。ジョオンズは、歌の一節がきれるたびに、うなずいて「グッ

ド」と言った。が何がグッドなのだが、僕にはわからない。

船のほうは、その通り陽気だが、波止場のほうはなかなかそうはいかない。どっちを見ても泣いている人が、大ぜいある。君のおかあさんも、泣いていられた。妹たちも泣いていたらしい。涙は見えなくとも、泣かないばかりの顔は、そこにもここにもある。ことに、フロックコオトに山高帽子（やまたかぼうし）をかぶった、年よりの異人（いじん）が、手をあげて、船の方を招くようなまねをしていたのは、はなはだ小説らしい心もちがした。

「君は泣かないのかい」

僕は、君の弟の肩をたたいて、きいてみた。

「泣くものか。僕は男じゃないか」

さながら、この自明の理を知らない僕をあわれむような調子である。僕はまた、微笑した。

船はだんだん、遠くなった。もう君の顔も見えない。ただ、扇をあげて、時々こっちの万歳に答えるのだけがわかる。

「おい、みんなひなたへ出ようじゃないか。日かげにいると、向こうからこっちが見えない」

久米（くめ）が、皆をふり返ってこう言った。そこで、皆ひなたへ出た。僕はやはり帽子をあげて立っている。僕

のとなりには、ジョオンズが、怪しげなパナマをふっている。その前には、背の高い松岡（まつおか）と背の低い菊池（きくち）とが、袂（たもと）を風に翻しながら、並んで立っている。そうして、これも帽子をふっている。時々、久米が、大きな声を出して、「成瀬（なるせ）」と呼ぶ。ジョオンズが、口笛をふく。君の弟が、ステッキをふりまわして「兄さん万歳」を連叫（れんきょう）する。――それが、いよいよ、君が全く見えなくなるまで、続いた。

帰りぎわに、ふりむいて見たら、例の年よりの異人（いじん）は、まだ、ぼんやり船の出て行った方をながめている。すると、僕といっしょにふりむいたジョオンズは、指

をぴんと鳴らしながら、その異人の方を顋（あご）でしゃくって He is a beggar とかなんとか言った。
「へえ、乞食（こじき）かね」
「乞食さ。毎日、波止場をうろついているらしい。己はここへよく来るから、知っている」
　それから、彼は、日本人のフロックコオトに対する尊敬の愚（ぐ）なるゆえんを、長々と弁じたてた。僕のセンティメンタリズムは、ここでもまたいよいよ「燃焼」せざるべく、新に破壊されたわけである。
　そのうちに、久米と松岡とが、日本の文壇の状況を、活字にして、君に報ずるそうだ。僕もまた近々に、何

か書くことがあるかもしれない。

（大正五年九月）

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店
１９５０（昭和25）年10月20日初版発行
１９８５（昭和60）年11月10日改版38版発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月12日公開
２００４年３月10日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。